

# タコ野郎

大谷

有原

吉川

メンドーサ・エッセンス

とある空き地

客入れ

照明、ゆっくりと暗転

メン　ほう、ほう、ほたる来い、あつちの水はにがいぞ、こつちの水は甘いぞ、ほう、ほう、ほたる来い

1

やさしい音楽

照明、ゆっくりと全体を照らす

舞台中央で有原が風をあげている。(マイム)

傍らにメンドーサ (以下メン) が座っている

大谷、登場。二人を確認して、有原の風を見上げる

1

大谷

∴

昨日もいましたね。

∴

何してるんですか。

メンドーサ、持っていた懐中電灯を大谷に向ける

大谷

何、何。

何なの。

眩しい、眩しい。

やめてもらえます。やめてもらえます。

やめろつて。やめろつて。

有原

ストップピング。

メンドーサ、やめる

大谷

何。

メンドーサ、立ち上がり、懐中電灯を当てられた時の大谷を小馬鹿に真似をする

メン 何、何。  
何なの。  
眩しい、眩しい。  
やめてもらえます。やめてもらえます。  
やめろつて。やめろつて。  
有原 ストップピング。  
メン ∴  
大谷 何なんですか。  
腹立つな。  
メン 蛍。  
大谷 は。

メンドーサ、懐中電灯を大谷に向ける

大谷 だから、眩しいつて。  
やめろつて、やめろつて。  
有原 ストップピング。

メンドーサ、立ち上がり、懐中電灯を当てられた時の大谷を小馬鹿に真似をする

メン だから、眩しいつて。  
やめろつて、やめろつて。  
大谷 何なんだよ、お前は。  
何のつもりだよ。  
有原 ストップピング。  
大谷 もう終わってるよ。  
とめるタイミング、間違ってるから。  
そもそも何なんだよ、ストップピングつて。  
ストップだから。  
メン 蛍。  
大谷 何が。

メンドーサ、懐中電灯を大谷に向ける

大谷 だから、やめろつて。  
メン ∴  
大谷 点いてないのかよ。

メンドーサ、懐中電灯を点けたり、消したり

メン 蛍。  
大谷 何、その懐中電灯の明かりが蛍だつてこと。  
メン ：  
大谷 何か言えよ。  
有原 チョッピング。  
大谷 お前じゃねえよ。  
そつちの女の子の方だよ。  
何だよ、チョッピングつて。  
メン チョッピングく。  
大谷 何。  
チョッピングつて何。  
有原 知人の犬の名前です。  
大谷 何で今言つたの。  
メン チョッピングく。  
大谷 うわ。  
有原 本当の名前は違うんで、チョッピングと呼んでも、反応してくれません。  
大谷 それはそうだろうね。  
有原 はい。  
大谷 ：  
犬いないじゃん。  
何でいないのに、呼んでるの。  
メン 昨日、ホームセンターで、買いました。  
大谷 何が。  
メン 懐中電灯。  
大谷 そうなんだ。  
何で今、それ言つたの。  
聞いてないし。  
有原 ショッピング。  
大谷 うまくないよ。  
有原 ：  
大谷 それはそうでしょ。  
有原 ：  
大谷 別にうまくないから。  
これ以上ないつて位で、ショッピングつて言つたけど、そうでしょ。  
有原 ：  
メン 私思ふんです。  
何なんですか、あなた。

大谷 俺が思ってたよ。  
メン いきなり何なんですか。  
大谷 本当だよ。  
お前たちの方が、いきなり何なんだよ。  
メン ∴  
有原 ∴  
大谷 何で黙るんだよ。  
メン 私思っんです。  
あなた怖い。  
大谷 は。  
有原 確かに、あなたの喋り、威圧的ですよ。  
大谷 ∴すみません。  
確かに、そうかもしれないですね。  
いや、俺だけのせいじゃない気もするけど、確かに、∴、すみません。  
メン 辛い。  
大谷 ∴  
メン あなた、辛い。  
大谷 ∴何ですか。  
メン ∴あなた辛い。(からい)  
大谷 辛いで良いでしょ。  
漢字は一緒だけど。  
有原 辛いと言ったら、カレーだ。  
メン あなたカレー。  
大谷 何のゲーム始まったの。  
有原 キムチだ。  
メン あなたキムチ。  
大谷 キムチじゃないよ。  
有原 四川も。  
メン あなた四川。  
大谷 四川、地名だぞ。  
メン ∴  
有原 ∴  
大谷 何で急に黙るんだよ。  
メン 昨日、ホームセンターで、買いました。  
大谷 さっき聞いたよ。  
メン あげる。  
大谷 ∴俺に。  
メン あげる。  
大谷 ∴何で。  
メン あなた、四川。

大谷 四川じゃないって。  
メン あなた、辛い。  
大谷 ……  
何で、ですか。  
別に、辛くなんかないですよ。  
メン あげる。  
虫でもあり、命でもある。  
大谷 何言ってるの。  
メン ……  
夜になると、辛くなる。  
大谷 ……  
メン あげる。  
大谷 ……  
メン 部屋で、点けたり、消したり。  
大谷 ……  
有原 貰っていいですよ。  
私のお金で買ったんですけど。  
大谷 一言余計だよ。  
恩着せがましいでしょ。  
別にいりませんよ。  
ていうか、自分の金で買えますよ。  
有原 ……  
大谷 ……辛そうですか、俺。  
メン 座れば。  
大谷 ……  
メン 風が気持ちいい。  
大谷 ……  
メン 気持ちいいのは、良いこと。  
有原 下ネタではありません。  
大谷 分かってるよ。  
  
大谷 ……  
優しい音楽  
メンドーサ、座る  
  
大谷 ……  
有原、座る  
  
大谷 ……  
音楽、フェイドアウト  
大谷、座る

二人 立つ  
大谷 急いで立つ。  
二人 立つ。  
大谷 座る。  
二人 立つ。

大谷 何なの。

一緒は駄目なの。

メン ちょっと楽しい。

大谷 :

メンドーサ、座る

メン 楽しいのも、良いこと。

大谷 :

有原 下ネタ (ではありません。)

大谷 分かってるよ。

大谷、座る

大谷 本当だ。

風が気持ちいい。

:

昨日も見たんです。

何してるんですか。

メン 私たちも見た。

大谷 俺を。

メン 犬を連れてた。

大谷 : 違う人だね。

メン 人の後ろを歩いていた。

大谷 続いてたんだ。

そうだったかな。

そうかもしれない。

憶えてないや。

有原 昨日も今日も、同じくらいの時間ですね。

大谷 ああ。そうですね。

何となく、日課みたいに (なってるのかもしれないです)

有原 仕事しろよ。

大谷 してるよ。

俺の素性も何も知らずに、適当なこと言うなよ。

夜の交通整備の仕事してますよ。  
むしろ、あなたの方でしょ。多分だけど。

::

何してるんですか。

有原 おっしゃる通り、無職です。

大谷 あ、何か、すみません。

いや、そつちじゃなくて、

今、何してるんですか。

有原 何してるように見えますか。

大谷 風上げ。

有原 ::

大谷 してるように見えるんですけど。

有原 ::

大谷 風が見えないんですよ。

だから、何してるのかなって。

風、落ちる

メントーサ、風を拾い上げ、二人で、再び風を上げる

大谷 ::

有原 風上げしてますよ。

ね。

メン :: (うなづく)

大谷 ::

すみません。

あの、

有原 見えませんか。

大谷 見えません。

有原 まあ、良いじゃないですか。

大谷 ::

見えませんが。

::

照明、暗転

2

やさしい音楽

照明、ゆつくりと全体を照らす

舞台中央で有原が風をあげている。傍らにメントーサが座っている

大谷 登場。

大谷 こんにちは。

有原 こんにちは。

メン こんにちは。

大谷 ……今日も、俺には見えません。

大谷、メンドーサに懐中電灯を返す

大谷 ありがとう。

メン 命。

大谷 何となくわかるかな。

メン 命は、明かり。

大谷 ……

メン 辛い。

大谷 辛い。

いや、辛いかな。

君の言った通りだよ。

夜になると、辛い。

だから、夜の仕事を選んだらうけど。

帰ると、部屋の中は暗いままなんだよ。

辛い。

有原 メンドーサ。

大谷 ……

メンドーサ。何が。

有原 彼女の名前。

大谷 え。

メンドーサ。

日本人じゃないんですか。

え、日本語喋ってますよ。

有原 メンドーサは、生粋の日本人だよ。

大谷 え、生粋の日本人で、メンドーサ。

メンドーサ。

メン はい。

有原 私は、彼女のことを、エッセンスと呼んでる。

大谷 何で。

有原 そうは思わないかい。

大谷 わかんないですけど。

有原 君と僕と、エッセンス。

エッセンスは、大事でしょ。



大谷 まあ、確におっさん二人の状況下では、大事なエッセンスかなど。  
有原 エッセンス。  
メン エッセンス。  
有原 エッセンス。  
メン エッセンス。  
有原 ほら、しつくりきた。  
大谷 そんなことないでしょ。  
メン ドーサはどこ行つたんですか。  
メン ここにいる。  
大谷 そういふことじゃなくて。  
有原 え、メンドーサも本名じゃないつてこと。  
有原 何でも良いでしょ。  
大谷 良くはないでしょ。  
メン チョッピングもそうですけど。  
メン 名前、違うんでしょ。  
有原 呼んでも反応しないんでしょ。  
メン おかしいですよ。  
大谷 私、気に入ってる。  
有原 え。  
メン 私、気に入ってる。  
大谷 マジで。  
メン メンドーサって呼ばれて、楽になった。  
大谷 何で。  
メン 私のことを見て、真剣な目で、メンドーサって呼んでくれた。  
大谷 ちよつと楽になった。  
有原 いや。  
大谷 呼んでみれば良い。  
有原 は。  
大谷 呼んでみれば良い。  
メン ∴  
有原 ∴  
大谷 メンドーサ。  
メン はい。  
有原 エッセンス。  
メン はい。  
大谷 メンドーサ。  
メン はい。  
有原 エッセンス。  
メン はい。  
大谷 分かんない。分かんない。

何でも良いつてこと。  
名前あるでしょ。  
メン パパって呼ばれて、嫌だったか。  
大谷 は。  
メン パパって名前じゃない。  
大谷 何。  
メン でも、パパって呼ばれて、嫌じゃない。  
一緒。  
有原 ここでのパパは、下ネタのことじゃないですよ。  
大谷 分かってますよ。  
：  
何で。  
：  
お前たち、何を知ってる。  
メン ：  
有原 どうしたんですか。  
大谷 ；いや。  
俺の何を知ってるんだ。  
有原 何も。  
大谷 嘘だ。  
メン 何も知らない。  
大谷 ；  
有原 何かあるんですか。  
大谷 ；いや。  
メン メンドーサでも、エッセンスでも、何でも良い。  
私がここにいて良いなら、私を呼んでくれるなら、私はそれで良い。  
大谷 ；

大谷 上を見る

大谷 何しにここに来たんですか。  
何か、企画的なこと、あるでしょ。  
誰かに頼まれたとか。  
有原 良い風が吹いてるような気がしたんですよ。  
呼ばれた感じっていうんですか。  
大谷 風なんて、ないじゃないですか。  
メン あるよ。  
大谷 ないよ。  
どこにもないでしょ。  
メン あるよ。

大谷 どこに。  
有原 どうなんだろうね。  
大谷 ∴  
有原 私にも、時々分からなくなる時がありますよ。  
まあ、でも、良いんじゃないかなって思うんですよ。  
大谷 ∴

吉川、登場

吉川 見つけた。  
メン ∴  
大谷 ∴  
有原 こんにちは。  
大谷 あ、こんにちは。  
吉川 誰だよ、お前。  
大谷 あ、すみません。  
吉川 まあ、でも一応、こんにちは。  
大谷 こんにちは。  
吉川 帰るぞ。  
メン ∴  
吉川 帰るぞ。  
メン ∴

吉川、メンドーサの腕を掴み

吉川 帰るぞ。  
メン 放して。

メンドーサ、吉川の腕を振りほどく

メン 帰らない。  
吉川 お前な。  
大谷 メンドーサの知り合い。  
有原 エッセンス。  
メン はい。  
大谷 メンドーサ  
メン はい。  
有原 エッセンス。  
メン はい。  
大谷 メンドーサ。

メン はい。  
有原 エッセンス。  
メン はい。  
大谷 メンドーサ。  
吉川 何してんだ お前ら。  
大谷 確かに。  
空気考えろよ。  
俺もだけど。  
吉川 お前、騙されてるんだよ。  
メン 別に騙されてない。  
吉川 騙されてるよ。  
この男に付いて歩いて、一体何があるって言うんだ。  
騙されてるんだよ。  
じやなきや、  
メン 何でここが分かったの。  
吉川 風見つけたんだよ。  
大谷 ::  
吉川 こんなでかい風、そうそうないだろ。  
大谷 ::  
吉川 帰るぞ。  
大谷 すみません、すみません。  
吉川 ::  
大谷 風、有ります。  
吉川 何言つてんだ お前。  
大谷 あ、いや。  
でかい風。  
吉川 お前、何言つてんだ。  
大谷 ええ。  
風、あるの。  
吉川 誰だよ、お前。  
大谷 あ、まあ、確かに。  
吉川 知り合いか。  
大谷 まあ、いや、その、  
メン 昨日から、知り合い。  
大谷 あ、そうですね。  
昨日からの知り合いです。  
吉川 悪いことは言わない。  
関わらない方が良い。  
大谷 ::  
吉川 帰るぞ。

メン 帰らない。

大谷 ちょっと待ってください。

吉川 ::

大谷 いや。

俺も別に関わりたいと思ってるわけじゃないんですけど。

::

吉川 何。

大谷 何だろう。

関わりたいと思ってるわけじゃないんですけど。

何て言うんですか、何かこう、まだ分からないこともいっぱいあって、それが同時に色々

俺の中のものと混ざりあって、それを何て言っているのか、

吉川 だったら黙ってる。

大谷 確かに。

メンドーサ、吉川の顔に懐中電灯を向ける。

吉川、多少、眩しそうな顔をするが、動かない。

吉川 ::

メン ::

大谷 強いですね。

メンドーサ、吉川から大谷に標的を代える

大谷 だから眩しいって。

人に向けるものじゃないから。

やめろ、やめろ。

メンドーサ、大谷から吉川に標的を代える

吉川 ::

メン ::

大谷 何で大丈夫なの。

メンドーサ、吉川から大谷に標的を代える

大谷 俺は良いつて。

やめろ、やめろ。

メンドーサ、やめる

大谷と吉川を小鹿鹿に真似る

メン だから眩しいって。  
人に向けるものじゃないから。  
やめろ、やめろ。

::  
俺は良いつて。  
やめろ、やめろ。

大谷 それ本当に腹立つから。

吉川 満足か。

大谷 動じないですね。

吉川 帰るぞ。

吉川、メントーサの手をとろろとする

メン 触らないで。

吉川 ::

大谷 すみません。  
嫌がつてるし、もう少し優しくした方が。

吉川 さつきから、お前誰なんだよ。

大谷 確かに。

有原 彼は、彼女に興味を持って、変態的な行為をしながら近寄ってきた男です。

大谷 そんなことないよ。  
たまに口開いたと思ったら、適当なこと言ってるんじゃないよ。

吉川 何だど。

大谷 信じるの。  
違います、違います。  
俺は、この近所に住んでる者です。

2、3日前に、一人を見て、気になって、昨日声をかけて、今日また来ただけです。  
特にどんな関係とかないです。

吉川 仕事しろよ。

大谷 してるよ。

お前もか。  
昨日も聞かれたよ。  
夜の交通整備してるから。  
どうせあなたも無職なんですよ。

吉川 社長だよ。

大谷 え。

吉川 企業の社長だよ。  
関連会社5社。従業員約3000人。

社長だよ。

大谷 　　：

　　適当なこと言つて、すみません。

吉川 お前さ、変態的な行為をしながら近寄るつてどういふことだ。

大谷 そんなことしてませんよ。

　　どういふことか、俺にも想像つかないしね。

　　信じるなよ。

　　さつき、自分でも言つてたでしょ。

　　騙されてるだけだつて、あなたも騙されてるでしょ。

　　：

吉川 どつちにしろ、あなたには関係ないことです。

　　帰るぞ。

メン だから触らないで。

大谷 落ち着きましょう。

　　嫌がつてるのを、無理矢理なんとかしようとしても、駄目ですよ。

　　本人にとっては、必要なことかもしれない。

　　：

　　そういう時期つてあるんですよ。

有原 そういう時期つてあるんですよ。

大谷 騙してるとか、騙されてるとかじゃなくて、

有原 騙してるとか、騙されてるとかじゃなくて、

大谷 周りから見とおかしなことつて言うんですか、

有原 周りから見とおかしなことつて言うんですか、

大谷 そういうのが必要な時期つて、あるんですよ。

有原 そういうのが必要な時期つて、あるんですよ。

大谷 聞いてやらなきや駄目なんですよ。

有原 聞いてやらなきや駄目なんですよ。

大谷 見守つてやらなきや駄目なんですよ。

有原 見守つてやらなきや駄目なんですよ。

吉川、メンドーサ、最初は太谷を見ているが、徐々に、有原の方に聞き入る

大谷 すみません。

吉川 　　：

メン 　　：

大谷 俺言つてたよね。

　　何、そつちに聞き入つてるの。

　　そいつ繰り返してただけでしょ。

　　お前、何のつもりだよ。

有原 そこそそ良いこと言つてたから、復唱してみました。

大谷 そこそこつて失礼だろ。  
有原 そこそこ感動しましたよ。  
大谷 だから、そこそこつて失礼だよ。  
ま、別に、特別なこと言つたわけじゃないけどさ。  
メン 私帰らない。  
吉川 何で。  
大谷 すみません。  
吉川 何だよ。  
別に今は無理強いしてるとかじゃないだろ。  
大谷 いや、お二人はどんな関係なんですか。  
有原 親子だよ。  
大谷 親子。  
吉川 兄妹だよ。  
大谷 お前黙ってるよ。  
あ、兄妹なんだ。  
：  
お兄さん。  
吉川 ああ。  
大谷 妹。  
メン ：  
大谷 あ、そうなんですか。  
いや、すみません。  
メン 私、帰らない。  
吉川 何で。  
メン いつかは帰る。  
でも、今は帰らない。  
吉川 だから何で。  
メン わからない。  
自分でもわからない。  
今は、風を見る。  
座つて、空を見て、風を見る。  
そつしたい。  
大谷 ：  
見えないの、俺だけ。  
吉川 何の意味があるつて言うんだ。  
メン わからない。  
何の意味もないかもしれない。  
でも、私の今までにも、何か意味があつたの。  
お兄ちゃん的生活は、全部意味があるの。  
意味がないつて、悪いこと。



吉川 わからないことって、悪いこと。  
俺はそう思うよ。

無駄だろ。

そんな時間、無駄だろ。

大谷 今決めなくても。

吉川 ::

大谷 すみません。

今決めなくても、今無駄でも、もう少し先で、無駄じゃないかもしれない。

吉川 ::

大谷 すみません。

吉川 ::一旦、帰るよ。

吉川、退場

大谷 何か、すみません。

メン 辛い。

大谷 ::

メン いつから辛い。

大谷 ::

メン いつから辛い。(からい)

大谷 辛いでいいよ。

いつからだろうね。

もしかしたら、とつづくに辛くないのかもしれない。

::

実は俺

有原 あろ。

大谷 何。

凧、落ちる

メントーサ、凧を拾い上げ、二人で、再び凧を上げる

有原 何か言おうとしました。

大谷 いや。

::

わざとじゃないですよ。

有原 何が。

大谷 いや。

::

俺には、見えないんですよ。

有原 良いんじゃないかな。

大谷 俺にだけ見えないんですかね。  
有原 どうだろうね。  
どっちでも良いんじゃないかな。  
大谷 落ちたら、上げて。  
落ちたら、上げて。  
∴  
そうですね。  
∴  
今日も懐中電灯、借りていいかな。

照明、暗転

3

やさしい音楽

照明、ゆつくりと全体を照らす

舞台中央で有原と吉川が風をあげている。傍らにメンドーサが座っている

大谷、登場。

大谷 え。  
何で、あなたまで風上げてるんですか。  
有原 こんにちは。  
大谷 あ、こんにちは。  
いやいや、何で、あなたまでやってるんですか。  
吉川 ああ、こんにちは。  
大谷 ∴こんにちは。  
メン ∴  
大谷 こんにちは。  
あ、懐中電灯。  
メン あげる。  
私にはもう、必要ない。  
あなたには、必要。  
大谷 辛いから。  
メン ∴  
大谷 ∴  
じゃあ、貰つとこうかな。  
有原 良いですよ。  
私を買ったものですけど。  
大谷 貰つて良いですか。  
有原 どうぞ。

大谷 金払いましょうか。  
有原 いりません。  
大谷 :  
だったら、恩着せがましく言うなよ。  
有原 何ですか。  
大谷 いえ。  
それより、どうしたんですか。  
お兄さん、帰ったんじゃないんですか。  
吉川 帰りましたよ。  
大谷 近くに住んでるんですか。  
吉川 いえ。  
ホテルに帰ったんです。  
大谷 あ、なるほど。  
:  
何で風上げてるんですか。  
吉川 え。  
大谷 何でお兄さんまで、風上げてるんですか。  
吉川 何でだろうな。  
何となく、俺もやってみようかなって。  
よく分かんないな。  
大谷 仕事大丈夫なんですか。  
こんなところで遊んでて。  
吉川 仕事は片づけてきたから。  
大谷 そうですか。  
吉川 君こそ、毎日毎日、仕事しろよ。  
大谷 してますつて。  
吉川 何だったら、どっか紹介しようか。  
大谷 だからしてますつて。  
何で俺をそんな無職にしたいんですか。  
すぐそばにいる奴の方が、絶対にそらでしょ。  
有原 私に仕事紹介してもらえますか。  
吉川 嫌だ。  
メン 駄目。  
有原 :  
大谷 仕事行く前の散歩ですよ。  
気持ちを高めるためつていうか。  
吉川 そうか。  
キャンプ中のプロ野球選手みたいだな。  
大谷 何ですかそれ。  
吉川 :

有原 俺は分かりますよ。  
吉川 分かるよな。  
有原 朝の散歩ですよな。  
吉川 そう。  
有原 砂浜で抱負叫んだりして。  
吉川 そう。  
有原 どうでしょう。  
仕事紹介してもらえませんか。  
吉川 嫌だ。  
メン 駄目。  
有原 ……  
大谷 正しいと思います。  
そんな仕事したい人なの。  
メン 縛られない方が良い。  
あなたは、縛られないままが良い。  
あなたは、甘いところ。

メンドーサ、懐中電灯を大谷に要求  
大谷、メンドーサに懐中電灯を渡す

メン 私たちは、虫。

吉川、楽しそうに、舞台を広く使って風上げる

吉川 おっと。  
大谷 楽しそうですね。  
吉川 そうだな。  
楽しいよ。  
大谷 意味がないこと、嫌いなんじゃないんですか。  
吉川 嫌いだね。  
大谷 わからないこと、嫌いなんじゃないんですか。  
吉川 嫌いだね。  
大谷 楽しそうですね。  
吉川 皮肉か。  
大谷 そうですね。  
吉川 後々、意味があるかもしれない。  
後々、分かるかもしれない。  
君がそう言ったんだけどな。  
大谷 ……確かに。  
吉川 そういうこともあると思うよ。

大谷 どうしたんですか。  
吉川 何が。  
大谷 いや、昨日と違うなって。  
吉川 昨日と今日は違うものだろう。  
大谷 ……確かに。  
吉川 おっと。  
何か、コツとかあるのか。  
有原 ないですね。  
吉川 綺麗に上がってますよね。  
有原 そうですね。  
吉川 風の流れとか、見えるんですか。  
有原 見えませんね。  
吉川 おっと。

#### 吉川、移動

吉川 その左手の使い方とかが大事なのかな。  
有原 そんなことないと思いますよ。  
吉川 俺のやたら不安定じゃないですか。  
有原 そうですね。  
吉川 何が違うのかな。  
有原 分かんないですね。  
吉川 コツ教えてくださいよ。  
有原 無いですね。  
大谷 お前、全然役立ってないな。  
何かアドバイスはないのかよ。  
吉川 あ、落ち着いた。  
こんな感じかな。  
有原 分かんないですね。  
自分じゃないんで。  
大谷 「そうですね。」で良いだろう。

#### しばし、風を見上げる

メンドーサ、吉川に懐中電灯を向ける。微動だにしない。むしろ見つめ返す。

大谷 そこは、昨日と変わらず強いままですね。  
吉川 昔から、こういう遊びを良くしてたからな。  
大谷 どんな遊びですか。

メンドーサ、懐中電灯の標的を吉川から、大谷へ。頑張つて見つめ返す

吉川 慣れば、どうってことないだろ。

大谷 そんなことはないですけどね。  
とりあえず、昨日と今日を変えてみました。

吉川 良いことだ。  
仕事を紹介しようか。

大谷 別に良いですつて。  
これ、どんな遊びなんですか。

吉川 懐中電灯を当てて、眩しいって顔をしたら、真似するってゲーム。

大谷 何が楽しいんですか。

吉川 意外に楽しいもんだぞ。

大谷 腹立つだけでしょ。

吉川 それが楽しいんだろ。

大谷 性格悪いゲームですね。  
もう良いんじゃないかな。

メンドーサ、懐中電灯を消す。

有原、大谷を小馬鹿にしながら

有原 眩しいって、眩しいって  
やめろ、やめろ

大谷 やってないだろ。

有原 ほら、恥ずかしいところを照らしてやるぞ  
ほら、ほら。

※的なことを適当に

大谷 やってないよ。

有原 今のは、下ネタではありません。

大谷 下ネタだよ。  
下ネタ以外の何ものでもないよ。

吉川 あゝ。

吉川、風が落ちる。メンドーサ拾いに行つて、風を上げようとする。

吉川 いいよ。

メン :

吉川、座る

吉川 疲れた。

大谷 :

吉川 昨日ね、夜中にもやってみたんですよ。

大谷 風ですか。

吉川 全然見えなかった。

大谷 でしょうね。

吉川 見えないんだけど、ぐいぐい引つ張られてね。  
不安な気持ちになる。

大谷 ……

吉川 でもね、何も見えない中で、ぐいぐい引つ張られると、何となく、そのままついていこう  
かなって気にもなる。

有原 下ネタではありませんよ。

大谷 分かってるよ。  
黙っててくれる。

吉川 今の方が全然楽しかった。

大谷 でしょうね。

吉川 無邪気に楽しかった。

大谷 ……

吉川 そんな気持ち、わかりますか。

大谷 何となく。

吉川 俺もです。

大谷 ……

吉川 妹もこんな気持ちだったのかなって。

有原 妹さんってのは、彼女です。

大谷 分かってるよ。  
黙っててくれ。

吉川 実はこいつね。  
結婚する予定だったんです。

吉川 俺の大学の後輩で、付き合いのある会社の次期社長と。  
まあ、お互いの家の事情とかも色々ありながらね。  
古臭い話ですけど。  
考えられないでしょ。

大谷 立場立場で色々あるんでしょうね。

吉川 こいつね、結婚式当日にばっくれやがってね。

大谷 ……

メン ……ごめんなさい。

吉川 良いよ。  
済んだことだ。  
それだけだったら、まだ良かったんですけど。  
行方不明ですよ。

大谷 ……

吉川 うちの社員に、たまたま妹を見かけた奴がいてね。

河原で風上げてるおっさんといたつて。  
何だそれつて思うじゃないですか。

大谷 確かに。

吉川 刑事みたいなことしましたよ。

大谷 聞き込みとか。

吉川 そう。

そしたら、一足違いで、電車でどっかにいつちやつて。  
誘拐じゃない。

有原 私は何もしてませんよ。

メン 私が勝手についていった。

吉川 不安になるでしょ。

大谷 ええ。

吉川 毎日、電話はくるんですよ。  
大丈夫だからつて。  
その内帰るからつて。  
どこにいるのかは言わずに。

大谷 ドラマみたいですね。

吉川 他人事ならね。

大谷 すみません。

メン ほう、ほう、ほたる来い、あつちの水はにかいぞ、こつちの水は甘いぞ、ほう、  
ほう、ほたる来い

吉川 最後には、今の歌を歌うんですよ。

大谷 大丈夫なんですか。

吉川 昔から、そういう奴だったから。

大谷 はあ。

メン 結婚しても良いかなつて思つたの。  
でも、ずっと考えてた。  
何で結婚しなきゃいけないんだらうつて。  
でも、しょうがないのかなつて。  
結婚式の一週間前。  
嫌になつた。  
そこからの一週間は、真つ暗だつた。  
そしたら、おじさんが風を上げてた。

吉川 俺も知らなかつたんですけどね。  
結婚相手、俺の後輩、結構女癖悪いらしくてね。  
まあ、妹なりに、色々我慢して、決心して、結婚に向かつていたと思うんですけどね。  
一週間前に、結婚相手と一緒にいた時に、他の女が乗り込んできて、面倒くさいことがあつたらしくて。

メン 座つて、空を見て、風を見てたら、落ち着いた。  
気付いたら、式場から出て、また、風を見に行つてた。



吉川 そんなこと全然知らなかったですからね。  
現場はパニックですよ。  
後輩も、全然理由がわからない。って言いやがったし。  
お前のせいだろ。  
：  
そんなことがあったんですよ。  
大谷 そうなんですか。  
メン ごめんなさい。  
吉川 良いよ。  
何の問題もない。  
メン ごめんなさい。  
吉川 大丈夫。  
大谷 何で俺に。  
吉川 ：  
大谷 何で俺に、話したんですか。  
吉川 何でだろうね。  
分からない。  
駄目かな。  
大谷 良いと思います。  
良かったと思います。  
分かる気がします。  
空が青くて、風が冷たくて、いつもある風景なのに、  
悔しいけど、そのおつきさんがいて、  
いつもの風景の中で、自分の中にあるものが、少しずつ溶けて、  
ここにいて、そういう話が、すつとできそうになりますよね。  
分かる気がします。  
吉川 ：  
メン 居酒屋で話した。  
大谷 え。  
メン 昨日、晩御飯食べようと思つて、居酒屋さんに行つたら、たまたま会つて。  
そこで、飲みながら、ゆっくり話した。  
大谷 え。  
吉川 むしゃくしゃして、飲まなきや寝れないと思つてね。  
普段はホテルからほとんど出ないんだけど、昨日は俺も、たまたま飲みに出てね。  
そしたら、ふらふらと妹が入ってきたんだ。  
大谷 居酒屋さん。  
吉川 ああ。  
有原 ちなみに私は、その場にいませんでした。  
大谷 お前、まるで役立たずじゃないかよ。  
吉川 駅前の何て言ったかな、角にある居酒屋さん、良い店だね。

大谷 その情報、いらなかったなあ。

有原 ちなみに私は、おじさんって言われるのを、あまり好きじゃない。

メン ごめんなさい。

大谷 どうでも良いよ。

ていうか、どう見ても、おじさんだよ。

有原 ∴

大谷 ならむな。

お前、全然役立ってないじゃないかよ。

何だよ、この状況に、ちよつと感動してだし、俺も、みたいな…

返せよ。

俺の感動っていうか、気持ちって言うか、返せよ。

有原 まあ、どうでも良いじゃないですか。

大谷 良くないよ。

大谷、懐中電灯をメントーサからとる

大谷、有原にあてる

有原 眩しい、眩しい。(薄いリアクション)

大谷 眩しい、眩しい。

楽しくないよ。

リアクション薄いんだよ。

暗転

4

やさしい音楽

照明、ゆつくりと全体を照らす

舞台中央で有原が凧をあげている。

大谷、登場。

大谷 あれ。

有原 こんにちは。

大谷 こんにちは。

∴

二人は。

有原 帰ったようです。

大谷 そうなんだ。

有原 仕事を紹介してもらいに来たんですか。

大谷 違うよ。

：そっか。  
帰ったのか。

大谷 座る

大谷 結局、俺には風が見えてないんですよね。

有原 どうでも良いんじゃないですか。

大谷 そうなんですかね。

有原 私も分からなくなりますよ。

私が今上げているのが、何なのか。

大谷 風でしょ。

有原 風を上げていたはずなのに、いつの間にか風じゃなくなってるんじゃないか。

大谷 そんなわけないでしょ。

有原 ：

風に引つ張られて、思うように動かせなくなって、何だかわからなくなる。

大谷 人生に似てますね。

有原 似てません。

大谷 ：

有原 風を受けて、耐え切れずに、壊れてしまうんじゃないかって不安になる。

大谷 人生も一緒ですね。

有原 そんなことありません。

大谷 ：

会った時から思ってるんですけど、  
うちらつて、話が合いませんよね。

有原 誰のせいでしょうね。

大谷 ：

有原 ふとした時に思うんです。

私は何をしてるんだろうって。

大谷 風を上げてるんじゃないですか。

有原 そう。

でも、風にぶら下がってるような気にもなってくるんです。

大谷 ：

有原 だったら、手を放せばいいのに、放せないんです。

自分で上げたはずなのに、まるで吸盤かなにかがあつて、手に吸い付いて、風に縛られて  
しまつてるような気になるんです。

大谷 ：

有原 空、見えますか。

大谷 もちろん。

有原 何色に見えますか。

大谷 綺麗な青空ですね。

有原 でもね、たまに、墨をかけられたように、真っ黒になる時があるんです。

大谷 ∴

今言ってる風は、どのタコの話なんですか。

有原 ∴

大谷 いや、良いです。

有原 ∴

大谷 あの二人も、辛かったんですね。

俺、辛そうですか。

有原 わからないですね。

大谷 俺もです。

∴

4歳の息子がいたんですよ。

3年前まで。

死んだんです。

あつちの方にあるため池で。

∴

仕事行く前に、ため池まで歩いて行ってるんです。

息子が死んだ場所に。

∴

息子が死んでから、色んなものを失いました。

だから、何となく、あの場所だけはって思ってるのかもしれない。

∴

それで、あなた達を見かけたんです。

ここで、一回だけ、息子と風上げしたことがありました。

そのことを思い出しました。

∴

妻がね、毎日、ため池に行ってたんです。

妻は、自分を責めていました。

自分が目を離したからって。

自分の責任で、死んだんだって。

俺も、妻を責めました。

妻は、毎日、一日中、ため池の前にいました。

それが俺を苛立たせました。

仕事が終わって、家に帰っても妻はいない。

そこからため池に妻を迎えに行って

∴

1年間、続きました。

∴

1年ちよつと過ぎた後、家に帰って、いつも通り妻はいなかったんですけど ∴妻は、ため池にもいませんでした。

家に、離婚届が置いてありました。  
それも良いと思いました。

::

何となく、全てが面倒くさくなって、仕事を辞めて、ただ家において  
気付いたら、俺も、ため池に向かっています。  
妻と同じ気持ちかどうかは分からないけど、俺も、ため池に向かっています。

::

聞いてます。

有原

聞いてますよ。

大谷

まあ、どつちでも良いです。

大谷、懐中電灯をつける

大谷

命は、明かり。

これ、貰いますよ。

有原

どうぞ。

大谷

それじゃあ。

大谷、退場しようとする

有原

一つ言つて良いですか。

大谷

:::どうぞ。

有原

私も、私の話を。

こう見えても私、元漁師だったんですよ。

大谷

海の男。

有原

はい。

大谷

見えませんね。

有原

そうですか。

大谷

下の方に糸を垂らしてたんですよ。

有原

そう。

大谷

面白いですね。

有原

漁師も大変なんですよ。

大谷

でしょうね。

有原

勘違いしないでくださいよ。

仕事が辛くて辞めたわけじゃないですよ。

好きで選んだ仕事です。

多少、過酷でも、全然気にならなかった。

結構若いうちに独立してね。

大変なのは、違うことで、燃料費だったり、人件費だったり、網とかの材料費だったりね。

特に燃料費、一時期、馬鹿みたいに高かった時期があつたんです。

どうにもできませんでした。

私みたいな、個人の小さな漁船じゃ、どうにもできませんでした。  
で、やめたんです。

大谷 そうなんですか。

有原 で、風上げしてます。

大谷 ∴

有原 何を釣ってたと思いますか。

大谷 決まってるんじゃないですか。

有原 そう、イカです。

大谷 は。

有原 イカが好きでねえ。

大谷 知らねえよ。

有原 何で分かったんですか、私がイカが好きなの。

大谷 知らねえよ。

お前がイカ好きなんて、全然知らねえよ。

有原 イカって、本当に美味しいですよ。

大谷 別に、イカの話いらんよ。

有原 どうです、今晚、イカ刺しで一杯。

駅前の角の居酒屋さんで。

大谷 行かないよ。

夜仕事だつて言つたら。

大谷、退場しようとする。

大谷 手紙を書こうと思います。

妻に。いや、元妻に。

謝つてないなつて思つて。

∴

何だろ、ありがとつて言います。

明日には、いないような気がして。

大谷、退場しようとする

大谷 あ、そうだ。

有原 ∴

大谷 いや、何でもありません。…このタコ野郎。

有原 ∴

優しい音楽

大谷、退場

照明、ゆつくりと暗転

丁